中世社会の宗教事情と寺院・神社

－近世の石見銀山領三十三ヵ所巡りを手がかりに－

2021年11月28日

井　上　寛　司

Ⅰ．はじめに

1.近世（江戸時代）の、とくに後半になって盛んとなる石見銀山領三十三ヶ所霊場巡りについて、本日は中世に遡って、その歴史的背景等について考える。

2.中世とは古代と近世の間、平安時代後半の11世紀末（院政期）から戦国時代の終わり（1600年の関ヶ原合戦）までの約500年間。

3.中世という時代は、今日とは社会の様相や価値観のあり方が大きく異っていて、現在の私たちには大変理解しにくい。しかし、私たちが知っている物事の多く（観音霊場巡りや仏教各宗派など）は、いずれも中世に成立したもの。それらが本来どういう謂われを持ち、またどのように成立したのかを知っておくことは重要。その概要と主な点について考えたい。

4.中世といえば、一般には「武士と合戦の時代」と理解され、武士の登場が古代とは異なる最も大きな特徴と理解されることが多い。しかし、この理解は一面的。武家と並んで、寺社が新しく一個の独立した社会勢力として登場し、従来の公家と合わせて、公家・武家・寺社の3者が相互補完的な形で機能したところに、中世社会の最も重要な特徴がある。中世では、「王法仏法相依」、すなわち「王法（公家・武家＝世俗政治権力）と仏法（寺社＝宗教勢力）とは相互依存・補完関係にある」とする考えが、共通の社会認識とされた。

5.言葉を換えていえば、中世社会はその全体が著しく宗教的な性格を帯びていて、人々の日常生活や行動の全般に宗教（とくに仏教や仏教思想）が圧倒的な影響を及ぼしていた時代だということでもある。これを生みだした背景として、とくに次の2つの要因が重要。

1)生産力や技術の未熟さから、技術と呪術が未分離で、生産と生活の維持・安定のためには神仏への祈りが不可欠とされた（⇒戦国期から近世にかけて農書が作成され、農業技術が宗教から分離・独立していった。近代合理主義・科学へと繋がる）。

2)上と同じ理由から、繰り返し飢饉が発生。加えて、激しさを増す戦乱の拡大によって、日常的に死と向き合わざるを得ない厳しい状況に置かれ、いっそう神仏への依存を強めた。

6.以下、これらの点を念頭に置いて石見銀山領三十三ヵ所に関わるいくつかの問題について考えてみたい（→資料）。

Ⅱ．各寺院の創建時期と宗派

1.創建時期

1)創建が古代に遡るとされる寺院が8ヶ寺、中世が16ヶ寺、近世が7ヶ寺、そして不明が2ヶ寺で、時期的には中世が最も多い。

2)しかし、中世の内でも戦国期の創建が10ヶ寺を数え、近世に創建の寺院5ヶ寺（④観世音寺と⑮臥龍院は不明）がともにその初頭に属すことと合わせ、戦国期から近世初頭にかけて集中的に創建されていった様子がうかがえる。

3)これは全国的な動きとも合致している。その背景には、戦国期から近世初頭にかけて、圧倒的多数を占める中下層の一般民衆の「イエ」（家名・家業・家産の社会的単位）が成立し、「イエ」単位の祖先供養が広範に展開していったことがある。⇒世界に例を見ない檀家制度の成立

檀家制度…近世以後寺院が信者の家（檀家）の葬祭供養を独占的にとり行うことを条件に、檀家との間にとり結んだ関係。寺請制度ともいい、婚姻・出生・死亡・出稼ぎ・奉公などによる戸籍の変更時に、檀那寺の発給する身元証明としての寺請証文（非キリスト教徒の証明）が必要とされた。

2.宗派

1)現在の宗派で見ると、曹洞宗が15ヶ寺、真言宗が11ヶ寺と最も多く、臨済宗は3ヶ寺、浄土宗は2ヶ寺、天台宗は1ヶ寺（不明は1ヶ寺）となっている。

2)しかし、これを創建時期と重ね合わせると、別の様相が見えてくる。

・古代に創建された8ヶ寺は、㉒甘南備寺（法相宗）を除き、すべて天台・真言両宗である（不明の内の1ヶ寺<㉛清泰寺>も真言宗）。

・中世に創建された寺院の内、⑬松林寺も天台宗寺院を改宗して創建されており（㉑仙岩寺は不明）、戦国期以前に創建された寺院でも2ヶ寺が真言宗（㉖・㉗）である。

・以上のことから、戦国期以前に創建された寺院は、臨済宗の2ヶ寺（⑰・㉚）を除いて、すべてが天台・真言両宗及び南都六宗（三論宗・成実宗・法相宗・具舎宗・華厳宗・律宗）のいずれかに属していたといえる。

3)こうした寺院のあり方は、「宗派」の概念が戦国期に転換したことと密接に結び合っている。

・宗派とは、本来「経典や教学の理解の相違に基づく僧侶の集団」のこと。それが、戦国期に一般庶民を信者として取り込み、強固な教団組織を作り上げたことで、今日一般に理解される「教義・儀礼内容を同じくする僧侶・信徒の全体を包括する宗教団体」を指すようになった。

・この「宗派」概念の転換は、仏教のあり方そのものが戦国期に大きく変化したことに対応している。戦国期までの中世仏教の中心に位置したのは、顕密仏教と呼ばれる天台・真言両宗と古代以来の南都六宗の8宗（＝顕密八宗）。そこでは、兼修（諸宗派を共に学び修得すること）と諸行（造寺・造仏や祈祷・写経・喜捨など、目に見える世俗的な形で信仰心を表すこと、寺社参詣や霊場巡りなどもその一例）を特徴とした。

顕密仏教…顕教と密教。この2つを一体のものとして行う仏教のあり方。 ・顕教…言語・文字によって説き示された教え⇒経典などの学問によって習得 ・密教…人間の理性では把握し得ない秘密の教え⇒瞑想・修行などによって習得

・これに対し、一般に鎌倉新仏教と呼ばれる、浄土宗や浄土真宗（一向宗）・法華宗（日蓮宗）・禅宗（曹洞宗・臨済宗）・時宗などの諸宗派（禅林と呼ばれる官立の臨済宗を除く）は、一行（いちぎょう、念仏・座禅など一つの行のみを行い、諸行・雑業を拒否する）・専修（一宗派のみを選択する）と易行（いぎょう、実践しやすい仏道修行）を唱えて鋭く対立。そして戦国期に、広範

な庶民を取り込んで強固な教団組織を構築していった。

・戦国期以後に創建された寺院が、真言宗の2ヶ寺（②・⑳）を除いて、すべて鎌倉新仏教に属すのも、その現れと理解することができる。

Ⅲ. 中世寺院の諸形態

石見銀山領三十三ヵ所を寺院形態という観点から見ると、いくつかの特徴が指摘できる。

1.神宮寺と別当寺（②・⑨・⑳）

・神宮寺とは、神社の本地仏を祀るために神社境内に建立された寺院。同じく別当寺は、神社境内の外に建立された神社に付属する寺院。ともに神仏習合を象徴する寺院。

・もともと日本の神社は中国伝来の寺院に対抗する形で古代に成立。その両者が、中世には本地垂迹説の成立と発展にともなって、表裏一体のものと理解されるようになり（＝神仏習合）、寺院と神社の景観や様相も大きく変化した。

本地垂迹説（ほんじすいじゃくせつ）…仏が日本の衆生（しゅじょう）を救済するため、仮に姿を変えて現れたのが日本の神々だとする考え。

・すべての神社の祭神にその本地仏が定められ、神社境内に神宮寺を初めとする仏教施設が設けられ、僧侶が境内に常住し、僧侶・神官が一体となって神社の祭礼（神前読経など）や運営に当たった。同様に、寺院境内にも鎮守社や鳥居などの神社施設が設けられ、また様々な神（梵天・帝釈天・金剛力士・四天王などの護法善神）が祀られ、僧侶もその祭礼に携わった。

・別当寺は、ここに記載された以外に、もっと多数存在したことが推定できる。

2.菩提寺

・いま1つの寺院類型として、武士によって創建された菩提寺（氏寺）があり、10ヶ寺（⑤・⑪・⑰・⑲・⑳・㉑・㉔・㉙・㉛・㉜）確認できる。しかし、実際にはこれまたもっと多かったと推定される。

・創建時に限らず、その後に武士によって再建・改宗されたり（㉓・㉛）、武士の祈願寺となったりした寺院（⑬・㉒・㉖）も多数に上る。

・その最も典型的な事例が⑪円光寺で、円光寺殿は創立者多胡辰敬の院号（戒名）であった。中世の有力武将たちはいずれも院号を持ち、その名を冠した寺院や塔頭を建立する場合が多かった。石見銀山には、その院号を用いた間歩があり、龍源寺間歩は小笠原長氏の院号で、もとは川本にあった寺院が後に石見銀山に移されたところから、その間歩名も生まれた。

・出雲の事例だが、毛利元就の菩提を弔うために、出雲の鰐淵寺にはその戒名を取って日頼院という塔頭が創建された（→史料一）。

3.六十六部

・いま1つの特異なものとして六十六部がある（⑭円城寺）。

六十六部…六十六部の『法華経』を書写し奉納するために、全国六十六か国の寺社（霊場＝諸国一宮などの著名寺社）を巡る行脚僧。六十六部・廻国聖（かいこくひじり）ともいう。

・これは観音霊場巡りなどとともに、中世への移行に伴って成立し、発展していった。

・六十六部の各国の奉納先は必ずしも固定されていなかったが、出雲では杵築大社（出雲大

社）、石見では大田南八幡宮が一般的。石見銀山領三十三ヵ所の⑩建興寺の「道法」には、「（大田村の）北南に八幡の宮あり、南の宮に六十六部を納める経堂有」と記されている。

・史料二は、これに関わる戦国末期頃の史料。ここでは石見国の3ヶ所が記され、先の⑭円城寺に加えて㉖金剛寺と一宮（物部神社）の名前が見える。

Ⅳ．中世の寺院と神社

1.一宮（国鎮守）と中世の神社制度

・一宮とは「国中第一の霊神」（各国内の最上位に位置する、最も有力な神社）のことで、各国の守り神（＝国鎮守）とされた神社。史料二を見ると、中国地方では因幡・出雲・石見・備前・備中・備後・安芸など、多くの国で一宮が六十六部の対象とされていたことがわかる。→本来は、諸国一宮を巡るのが六十六部のあり方だったのではないかと推察できる。

・中世には、この一宮（国鎮守）とは別に、京都とその周辺部に位置する二十二社（伊勢神宮や石清水八幡宮・賀茂神社など）があり、天皇とその居所である都（王城）の守り神として機能した。⇒日本の全体がこの両者の連携によって守られる体制＝二十二社・一宮制（王城鎮守・国鎮守制）

2.神社の一般的特徴

・これらに共通してみられる神社の特徴は、一定の空間領域やそこに住む人々を一括して守る、すなわち共同体など特定の社会集団の共同利益を守ることにあり、それは、個々人を対象として、その精神的な救済を目的とする仏教・寺院とは大きく性格が異なる。

・寺院と神社とのいま1つの大きな違いは、壮大な宇宙観などの高度で哲学的な理論体系を持ち、それを経典などの形で取りまとめている仏教に対し、神社や神祇信仰の場合、そうした教典に類するものを持たず、もっぱら神の祭り方などの儀礼体系のみによって成り立っていたところにある。

・仏教側が提示した理論（本地垂迹説）に基づいて理論武装し、発展を遂げた中世の神社は、実際には「寺院と同体＝寺院の一変容形態」と理解されていた。紛れもなく神社である諸国一宮が六十六部の対象とされたのも、こうした事情によるものと考えられる。

3.戦国期の転換

・神社や神官の中には、こうした仏教・寺院との関係に異議を唱え、それからの分離・独立を主張する者もあり（伊勢神宮の神官など）、中世を通じてその動きも強まった。

・戦国期における宗教構造の転換（鎌倉新仏教諸宗派が広範な庶民を取り込んで強固な教団組織を構築していった＝新しい「宗派」の成立）に連動する形で、神社においても、独自の理論構築（反本地垂迹説など）を通して、寺院・仏教から独立した一個の自立的な宗教（宗派）としての体裁を整えた。

・同じく戦国期に伝わった、特異な一神教としてのキリスト教を合わせて、諸宗派併存という今日に繋がる新たな宗教構造が誕生した。

Ⅴ．むすび－石見銀山と寺院・神社－

・本日は石見銀山領三十三ヵ所を手がかりとしながら、中世の寺院と神社のごく一端について述

べた。

・石見銀山領全体を見ると膨大な数の寺院・神社がある。その歴史や由緒はもとより、寺社名さえ分からないものも多数に上る。その全体像の解明は今後に残された重要な課題。

・またその中から、三十三ヶ所がどのように、またどのような基準に基づいて選択されたのかも全く分かっていない。

・中世から近世に懸けて、寺院・神社のあり方や社会との関わり方などがどのように変わっていったのかも、よく分かっていない。

・全体として、島根県における宗教史研究は大きく立ち後れている。石見銀山の解明のためにも、これらの課題に応えていくことが重要となろう。

史料1 **毛利輝元書状**（鰐淵寺文書）　『出雲鰐淵寺文書』二七五

日頼存（毛利元就）命の時、この方の志として、和多坊栄芸に対し下地を進めしめ候。しかる間、御報恩のため、鰐渕寺において極楽寺と申す旧跡、建立ありこれを改め日頼院と号す。末代菩提所として位牌を立て置かれ、日夜御弔の勤行怠転なきの由に候。しかる上は、日坏（牌）・常灯その外の諸入目<書き立て別紙にあり>以下、その調え肝要に候。（中略）

天正二
卯月十日　　輝元（毛利）（花押）

雲州鰐淵寺
和多坊栄芸律師

史料2 **六十六部奉納札所覚書**（余瀬文書）　『新鳥取県史』資料編古代中世Ⅰ

六十六部奉納所日[
（中略）

山隠道　丹波 穴宇 神池寺　丹後 普甲山 成相　但馬 進寺 浅間寺　因幡 一宮

伯耆 大山 美徳山　出雲 鰐淵 大社　枕木寺　石見 一宮 円城寺 金剛寺　隠岐 国符寺

播磨 立鴈山 法花寺　美作 八塔寺　備前 一品吉備津宮　備中 吉備津宮 一品寺

備後 吉備津宮　安芸 厳島　周防

（後略）